

НОВАЯ СОВЕТСКАЯ ЛИТЕРАТУРА

2

テンドリャコフ＝奇跡の聖像・箕浦達二訳

カザコフ＝アダムとイブ・水野忠夫訳

獵犬物語・中里迪弥訳

静かな朝・中里迪弥訳

テディイ・中里迪弥訳

グレコフ＝風変わった美容師・中里迪弥訳

夏の街のにおい・中里迪弥訳

ボゴモロフ＝ぼくの村は戦場だった・中里迪弥訳

新しいソビエトの文学 2 江川卓・井上光晴編集

テンドリャコフ	奇跡の聖像	箕浦達二訳
カザコフ	アダムとイブ	水野忠夫訳
	獵犬物語	中里迪弥訳
	静かな朝	中里迪弥訳
	テディイ	中里迪弥訳
グレコワ	風変わった美容師	中里迪弥訳
	夏の街のにおい	中里迪弥訳
ボゴモロフ	ぼくの村は戦場だった	中里迪弥訳

発行 1967. 11. 30. (第1刷)
1974. 4. 30. (第1刷第2回)

発行者 井村寿二

発行所 勁草書房 東京都文京区後楽2-23-15
電話(03)814-6861

定価 外函に表示してあります

印刷者 白井倉之助 東京都青柳市根ヶ布 1-385

落丁・乱丁本はおとりかえ致します 精興社印刷・牧製本

0397-884210-1836

目次

テンドリヤコフ

奇跡の聖像

箕浦達二訳

1

カザコフ

アダムとイブ

水野忠夫訳

101

狢犬物語

中里迪弥訳

130

静かな朝

中里迪弥訳

152

テディイ

中里迪弥訳

165

グレコワ

風変わりな美容師

中里迪弥訳

197

夏の街のにおい

中里迪弥訳

255

ボゴモロフ

ぼくの村は戦場だった

中里迪弥訳

289

解説

箕浦達二
中里迪弥

355

テンドリャコフ

奇跡の聖像

箕浦達二訳

I

毎年、春の雪だけで氾濫した水が引く頃になると、ペレゴフカ川は『岸をえぐりとり』始める。まるまると肥った熊の胴体のように大きな大地の一片が、去年のごわごわした枯草だとか、きれいに踏み固められてできた岸辺の小道などをくつつけたまま、そこかしこで、どさりと音を立てて崩れ落ち、濁った水飛沫をはねあげては流れていく。

ペレゴフカ川は一年ごとに Gumnitskiy の村はずれに広がっている草原に執拗に食い込んでいく。

この時期になると、まだ澄みきっていない水溜りの中で、うろちょろしている魚をたまたま手掴みにすることもできる。冬の間、川に行けないで退屈しきっていた Gumnitskiy の子供たちは、どっとばかり川岸めがけてとびだしていく。彼らは魚がうまいこと食いつこうと食いつくまいとそんなことにはお構いなしに、みんなで申し合わせでもしたように、日が暮れるまで辛棒づくよく釣竿の先を水面に突き出して立っている。

ロジカ・グリチャーエフは小さい淀みの前に場所を選ぶと、ズボンを通してしみ込んでくる大地の湿気で冷えないように尻の下に板切れを敷き、もう何時間もじっと浮きを見つめていた。

松の木の皮で作った浮きは、淀みののろした流れでぐるぐる回っているが、時どきびたりと止まり、ものうげに、いやいやながら水の中に潜る、と思うと、針が川底にひっかかる。ロジカは釣竿を振り上げて糸をもっと遠くへ投げ込む。粘土を含んだ水は眠たげに渦を巻き、その上に竿の先が気重そうに垂れさがり、浮きは釣れる見込みなどさらさらないとばかりピクリともしない。立ち枯れて、ごわごわした芝草のある岸辺の小さな窪地全体が死んだもののように思われる。ロジカは、長いこと坐っていたために痺れてしまった足で立ち上がる、どこか、もっとほかに場所を変えてみようと思いがら、あたりを見回した。と、そのときだった。岸の断崖になったところの、粒の細かい砂の中から何か箱らしい物の黒ずんだ角が突き出ているのに気がついた。彼は近寄って、それに触（さわ）ってみた——すると腐った板のかけらが手に残った。

「土ん中に何かが埋められとった……川がそいつを洗い出したわけだ……さてよ、もしかすると宝物かもしれないぞ！」——こう思うとロジカの胸はドキンと波うった。

最初のうちは両手でほじくっていたが、そのうちにロジカは、さっき尻の下に敷いていた板切れを使ってせっかちに掘り始めた。掘るのに長くはかからなかった。

ものの十分もすると、彼は見つけものを左右に揺すぶって、砂の中からうまく引っぱり出すことができた。ロジカはそれを足もとに置くと、カビで腐蝕した箱をしげしげと眺め、転がしてもみた。箱は重くはなく、グムニシチ村の消費組合販売店が仕入れるドロップやキャンディの箱に似ていた。幅も長さも、平べったいところも全くそっくりだったが、ただ作りがもっと頑丈で、半ば腐った板はかなり厚く、板と板の隙間には垂麻屑が詰めてあった。そして、その垂麻屑が腐らずに残っていたところからみて、また、それが指でぼろぼろに崩れなかったところからみて、継目におそらく樹脂を塗り込んだのにちがいないとロジカは思った。

腐った板は錆びついた釘から簡単に剥がれた。その下にはさらに、へたくそに折り曲げられて折り目が裂けかかっている褐色の乾いたズツクの袋があった。

「みる、隠しこんであるぞ。ズツクの袋だ。これにも樹脂が塗ってある……きつと値打のある物にちがいない……」あせりと、未知のものにたいする甘い恐怖のために、ロジカの手はいうことをきかなくなり、ひざがしらがかクガク震えだした。彼はズツクの袋を箱から引っぱり出し、乾いた埃を払い落としながら、幅の広い、重たい板を取り出した……。

それは大きな、黒ずんだ板で、まるで燻^{いぶ}してでもある

ようにみえる。だが、それ以上のなにものでもないのだ！

失望と疑惑の念にかられたロジカは、それをじっと見つめたり、眼の前に持ち上げてあちら側こちら側とひねくり回してみた。燻したように黒ずんでみえる方の面に、ロジカは二つの白い眼球を見分けた。板には誰かの顔が描かれているのだった。ロジカは板を水の中に入れて、掌で丹念に洗ってみた。板は濡れて光り始めたが、黒ずんだ色調はこうしてもほんの少しはつきりしただけだった。さきほどから相も変わらずロジカの方を少し的はずれににらんでいるのは、その黒眼よりはむしろ、なんとなく陰気な、人嫌いの感じがする白眼の方だった。両眼と、かすかに浮かび出てきたあごひげとが、荷車の車軸の楔のように長い、真直ぐな鼻で結び合わされているのだなということがロジカにはだんだんわかってきた。ロジカはその顔全体——それは鼻に似つかわしく、長く引き伸ばされてのべつとした幅の狭い顔で、鼻孔のところから二本の深いしわが走っている——を見分けたし、その頭の上にある半円形の後光も見分けた。そして、彼は自分の発見したものが単なる聖像にすぎなかったことを理解した。

へたいした宝物じゃないや。こんながらくた物ならおばあさんの聖壇にもあらあ。だが、めっけものはめっけも

のさ。こいつがどんなにがらくたでも自慢の種にはなるというものだ」

ロジカは釣道具をしまうと、聖像を小脇に抱えて村の家をさして歩きだした。

2

母親と祖母は家の裏にいて、自作農地の仕事に精を出していた。いまにも落っこちそうな頭巾で頭を包み、ぶりぶりした顔をした祖母は、筋ばった手で犁の柄にとっつかまりながら畑を耕していた。ロジカの祖母を村人たちは「グラチーハ」(離のみやまがらすの意)と呼んでいた。彼女はとっくに六十の坂をこしていたが、家でのあらゆる男仕事は彼女だけがするのだった。木戸の柱が倒れると、祖母は斧を手にとり、わが娘のやくざな亭主をのろったり、神様や聖母の名を唱えたりしながら新しい柱を削った。祖母は自分で森からまき運び、自分で草を刈り、自分で乾草を納屋に運び、自分で畑を耕した。また、健康上のことでは苦情一つもらしたことのない自分の娘、つまりロジカの母親をさえ、はりやう「蒲柳の質」と呼び、いつも「わしが死んで葬式がすみゃ、この家は腐った葺みてえに崩れちまうだらうて」とぶつくさ言うのだった。この祖母はいえ、背が高く、骨ばっており、前からみるとまるで扉のようにこの幅があるが、横から見ると、板の

ように平べったく、顔もまた角ばって幅広く、太い頬骨がけわしくつき出ている。その頬骨の上の、浅黒い太いしわや小じわのからみ合っているかさかさに乾いたしわくちやまるけの中におさまっている黄色っぽい目が落ちつきなく、しかもかたくなそうにこちらをのぞいている。いま、祖母は犁に体ごとのしかかり、野良ばきのごでかい長靴で耕したあとの土くれを不器用にまたぎながら、馬をどなりつけているところだ。

「シーッ！ この罰あたりめ！ とっとと歩け！ このできそこないめ！ 背骨をどやしつけるぞ！」

ロジカの母親は、ほとんど眼が隠れてしまうほど頭巾を低くかぶって直射日光を避け、顔を大事にしていた。彼女は、冬のあいだはottaらかしにされて蒸れている耕地から去年のじゃがいもの茎を集め、それを燃え立っているたき火の中へ投げ入れていた。雪の下で腐っていた茎は、まだ、十分乾いていないので燃えが悪く、青みがあった灰色の煙が悪臭を放ちながら畑にたなびいていた。

「グラチーハ」ばあさんからロジカの母親に伝えられたものは、頬骨の高い顔と、白っぽいまつ毛をばちばちさせて緑色の目を細くするくせであった。だが、頬骨もそれほどひどくつき出ているわけではなく、角ばっていない顔は丸ぼちゃとしていて、小さなあごの下には、でっ

ぶりとした二重あごがついている。祖母のやせっぽちのところなどその片りんすらとどめていない。肩はむっちりとして柔かく、なだらかに流れていた。彼女の古い色あせたスカートは尻のまわりがびんとつばっていまにもビリッと破れんばかりである。祖母から孫のロジカに伝えられたものの方がはるかに多い。肩がやせているとはいえ、古い綿入れジャケツの下にはもう発育のよさが感じられ、額の広い大きな頭は直かに肩にくっついていてほとんど首がない。腕は細いが、その代わりに掌が大きくて指が短い。いま、ロジカはこの腕で幅の広い板を抱きかかえ、破れた長靴をはいた両足をふんばって立っている。頭はうつむきかげんで、おでこが前につき出ており、下唇にはできものができている（川へ落っこちて冷えたのでいっそう悪化している）——暴れん坊なのだ。こんなやんちゃな子供は、そのうちにグラチーハばあさんそっくりそのままのグラチーに成長するだろう。

「遊びつかれたのかえ？　うちのでて無し子は？」——祖母は、馬をとめて肩ごしに厳しい眼差しを投げかけながら、鞭で馬具の埃をはたきはじめた——「ワリーリカや、豚にじゃがいもをくれといで。それから、ほつつき歩いてばかりいるこの子を薪でも拾いに行かせなさい」

「ぼく、聖像を見つけたんだ」とロジカが自慢そうに言った。

「また悪戯わるまをしでかしたな！　一昨日のことだ、いたずら小僧たちが墓地で、巡礼のフェクルーシャの墓から十字架をひっこぬいて川に投げこんだちゅうじゃないか。むかしはこんなことをやろうもんなら、死ぬほどひびたかれたもんじゃったのに」

母親は、煙がしみて涙ぐんでいる眼をこすりながら近寄り、ロジカの肩を軽く叩いた。

「家に帰って勉強しなさい。学校の先生がお前にもっと勉強しろっておっしゃっているじゃないの……さあ、行きなさい、行きなさい、ここはおばあちゃんと一緒に片付けるからね」

「見てよ、こんなものを川岸で掘り出したんだよ」

ロジカは、聖像を地面に置いた。母親はちよつと口をつぐみ、のぞきこんで厳しい口調でたずねた。

「どこで見付けたの？」

「岸で掘り出したっていつてるじゃないか。箱ん中にはいつてたんだよ」

「おばあちゃん、ちよつとこっちへ来てよ」

祖母は汚れた手を古ぼけたスカートの裾で拭きながら腰を伸ばすと、耕した畑の上を長靴を引きずりながらやってきた。

「いつも悪戯いたづらばかりやりおって。イエス・キリスト様が、聖像が河原に転がってると。おい、ロジカ、いい

か、お前をかばってくれるお母さんがいたって、うそ言
うと承知せんぞ……」

祖母は、近寄ってひと目みると口をつぐんだ。明るい、
落着きのない眼が、深いしわの中で動きを止めた。

聖像は腐ったじゃがいもの茎が絡みついている土の上
に転がっていた。二つの白い眼は哀愁のこもった厳しい
視線を、青空に広がった軽やかな雲に向けていた。

働きつかれて静脈が浮かび上がった祖母の重たそうな
腕がゆっくり額の方にもち上がった。ごつごつした割れ
た爪のついている曲らない指を三本つき合わせて、十字
を切った。

「聖なる聖なる……公正なるイエス・キリスト様……ね
え——、ワレンカや、お前ちよつと見ておくれ。ああ、
大変だ！ だって、こりゃ、いいかい、ニコラ・モスト
教会の奇跡の聖像じゃないか……」

「なくなった奇跡の聖像だね」と母親も真剣にあいづち
を打った。

「ばかなことをお言いでないよ、」なくなった」だなん
て。ねえ、お前、なくなったのじゃのうて、再現なされ
たのじゃよ」

祖母は聖像を地面からひろい上げ、しっかりと両手で
胸に抱きかかえるようにして家の方に走り去った。彼女
の頭巾は完全に肩に落ちたので玉ねぎのようになかった

をした、小さく束ねた白髪があらわれた。

ロジカはいぶかしそうに上眼づかいで祖母の視線を追
っていた。へんだかしらんが、おばあさんの聖像の擱
み方は馬鹿に真剣だったぞ、仕事をほったらかした程だ
もの。あとで、どこで、どうして見つけたか根ほり葉ほ
り聴きはじめることだろう。気に入らない答え方をしよ
うものなら、首っ玉をぎゅっと擱まれるぞ」

「お母さん、ばく、ワシカんちへ行って勉強してくる
よ」とロジカは言った。

だが、母親には聞こえなかった。彼女は祖母の後姿を
見送りながら、背をのびし、頭巾をかぶりなおして、そ
の額のところでぎゅっと締めていたのだ。そして、胸を
突き出し、小幅な、上品な足どりで畑から出ていった。

3

夕方、家ではロジカの帰りを待っていた。

敷居をまたぐかまたがないうちにロジカは、家の中が
人びとでいっぱいなのに気がついた。ドムナ婆さん、ダ
リア婆さん、セクレチヤ婆さん、腰が二つに折れ曲っ
たジェレビツハ婆さんなどが詰めかけているのだ。これ
らのお婆さんたちにまじって、一抱え以上もある大きな
体をしたアグニア・ルーチキナ婆さんが、だぶだぶにふ
くれ上がった胸の下に短くて太い腕を組みながらでんと

構えていた。彼女の足は腫れていた。その水ぶくれした体は、家の中に坐ってばかりいるうちにいよいよふくらんでしまったのだ。ところが、今はこうして村の反対側のはずれから這うようにしてやってきたのである。頬と顎がぶるぶる震えてゐる彼女の水っぽい顔には、泣き出さんばかりの敬虔の情がへばりついており、

「足が、わての足が！」

という重苦しそうなため息を胸の奥から吐き出していた。

扉のすぐそばの腰掛けの一番はしに、臆病そうな老人、つまり、夜警のステューバ・カザチヨク爺さんがちょこんと坐っていた。彼の日焼けした口は固く結ばれており、涙でまぶたが赤くはれてゐる両眼は、驚きと疑惑の念をこめて、はいつてきたばかりのロジカにじっとむけられていた。じいさんは、真先に小さく十字を切り、鼻汁をすすり上げ、毛の生えていない臉でたびたび瞬いてゐるうんだ両眼を少年からはなさずに、腰掛の上でもじもじしていた。

母親と祖母は、二人ともまるでお客に呼ばれた時のように並んで坐り、皮が赤くなるまでみがきあげた手を膝の上に置いていた。祖母のまばらな髪の毛は、きれいに梳かれて油がつけてあり、母親の白い首にはオレンジ色の首飾りがかかっている。

ロジカが拾ってきた聖像はもう部屋の聖壇に安置され、その前には、鉛筆のように細い数本のローソクの、ごく小さなまるで米粒のような灯がともっていた。冷厳な隔絶感をただよわせた聖像の中の老人は、ローソクの火とお客達の頭ごしに、大きくみひらいた白眼でロジカを迎えた。

「あんたはわてらの天使じゃ、お利口さんじゃのう！」

腰の曲ったジェレピツハ婆さんが出会いがしらに、濡れた炭のように光沢のない黒い眼をやさしく向けて、歌うような調子でいった。

「神様は、誰にお恵みを与えなすたらよいか御存知じやのう。ほんに天使じゃて」

ところが「天使」のロジカは、濡れた鼻を袖で拭うと、お客たちのわけのわからない注目を避けて、かたくなに頭を下げ、おでこを前に突き出して——とび出ている耳がどぎまぎしていることを示している——人びとの間をぬうようにしてベチカの方へずり寄っていった。

「神様に選ばれた子じゃ、わてらの頼みのお人じゃ」アグニア・ルーチキナの顔が微笑でくずれた。

「あつ、わての足が、足が……」

「ワルワーラさんや、お前さんはしあわせもんじゃ……こういう息子をもって！」とジェレピツハ婆さんがロジカの母の方に振り向いて言った。「第二の使徒バンテレ

イモンじゃのう。ほんとに第二の守護者バンテレイモン様だよ……これが主の御心なのじゃ。ほんとに奇跡の聖像が、どんな奴の手にだって入るって訳のもんじゃないから……う……良い子だから、もっとこっちへ来な。恐がることはないよ。お前さんの可愛い手に口づけしたいののう」

ロジカは疑いぶかそうに、荒々しく眼を光らせ、度を失って敷居の方へ後ずさりした。

「お前は何とまあ、こっちへおいで、聞きたいことがあるから」とロジカの祖母が厳しくいったが、すぐ、もっと優しい口調で、「さあ、おいでったら、おいで、噛みつくわけじゃないから」とつけたした。

ロジカはますます深くうなだれて、おずおずと近寄った。

「ねえ、なんなの？」

「いい子だから、聖像をどこで見付けたかも一度いつてみんさい」

「聖像だって？……何回話せばいいのかなあ？ 岸で掘り出したんだよ。パンチューヒンの淵からいくと右手のところだ」

耳を澄ませてちょっと静かになっていた老婆たちは、いっせいに溜息をついた。

「優しい心根が幸福に行き当たったのじゃのう……無欲

さがのう……」

「神様が御自分で、その手をもって指し示して下さったのに違いない……わての足が、足が……ああ、罪なことじゃ……」

「それで、どんなふうにして聖像に行き当たったんだね？」と祖母は尋問を続けた。

「岸で箱の隅が突き出てるのを見つけて、掘ったんだよ……そうしたら……これが……」

「この聖像のないあたしたちの教会はみなし子で、穢れているのじゃよ」

「奇跡の聖像が消え失せてからというものは、夜な夜な誰やら円塔を鋸で引いているということじゃげな。夜中に雄鶏おんどりが時をつぐるちよつと前にのう……」

「神様がおわしますはずの神殿が空になったので、いろんな悪魔どもが巣くったのじゃろうよ」

ぱつとはずんだ会話のやりとりを、ロジカは恐怖と怪訝の念をもって聞きながら、きよろきよろあたりを見回していた。小さなローソクの光で僅かに照らされている暗い部屋の隅には、聖像が黙々と立っており、黒い板の上に二つの目玉が白くみえていた。

4

客達が帰っていった。暗い窓の向うの方で、

「わての足が……足が……」という泣くような声が最後に聞こえてきた。

祖母は、聖像の前からローソクを取り去り、ランプを消した。聖壇には燈明が残された。真暗な家の中で、祖母だけが緑がかった夢幻の蝶のように空間で舞っていた。あるときは十字を切ったり、あるときはひそひそと唇が囁いているだけで、身じろぎ一つせず、あるときは勢いよく床にひれ伏したりして、祖母は寝る前のお祈りをしているのだった。

人間は単純につくられている。祖母は聖像にお辞儀をし飽きると、ぶつぶつ独り言をいったり、うめいたりしながら、冷えたベチカの上に這い上がった。そして、甘ったるいあくびをして、そこで体を伸ばしたかと思うと、一秒後には大きないきをかきはじめた……。

それにひきかえ、ワルワラは、寝相の悪いロジカからずり落ちた毛布を掛けてやると、下着だけになって、背中の方に髪をたらし、むき出しの膝を冷たい床に下ろして、微動だにしない燈明の火を憑かれたようにじっと見詰めた。

グラチーハ婆さんが背後でいきをかいている。窓の外では、実桜の若葉が風にそよいでいる。遠くで寝ぼけた雄鶏が声をはり上げて鳴いたが、あきらかに時を間違えたのだ。その鳴声には一羽の雄鶏も応えなかった。あ

たりは静まり返っている。

ワルワラは胸の上に両手を合わせ、とりとめもなく囁きはじめた。

「お慰み深い神様……聖者ニコラ様……私は絶えざる不安の中に住んでおります……私をお救い下さいませ、迷いを解いて下さいませ……」

ワルワラは毎晩、聖像が安置してある聖壇にむかって「神よ、助け給え!」とつぶやくのである。

もうこうするようになってから何年にもなる。

かつて、娘だったころには恐いものなぞ何一つなかった。恐怖をもって明日をのぞきこむようなことはなかったし、神も悪魔も信じはしなかった。食卓につくときにも額に十字を切らず、母親つまりグラチーハ婆さんからぶつぶつ文句を言われると、

「お小言なんかもう沢山だわ! いまじゃそんなのは流行おくれよ。自分の健康のために十字を切ればいいじゃないの、そんなに十字を切るのが好きなら……」

と口ごたえたものだった。

そのころ一番気掛かりだったのは、ステパンが崖の、倒れた白樺のところへ来てくれるかどうか、ということだった。戦争中だったので、若者の姿も村ではまばらだった。ステパンもまた陸軍病院退院後の休暇で帰ってきていたのだが、負傷した足は跛を引いていた。彼は娘のよ

うなまつ毛と、黒い優しそうな眼をしており、ギターを弾きながら「伸びておくれよ、背高のっぼの裸麦、二人の秘密をかくすほど」と伴唱するのだった……グムニシチ村には若い娘たちが少なくはなかったけど、ワルウィラは不美人の中にはいらなかった。——そばかすだらけの顔でもなかったし、均勢のとれていない体でもなかった。ステバンは、彼女のふっくらと盛り上がった胸にもたれかかり、乳呑児のようにまどろみ始めることがよくあった。当時の彼女は、どんな力をもってしてもこのステバンを自分から引き裂いていくことはできやしないという思いあがった考えにとりつかれていた。「伸びておくれよ、背高のっぼの裸麦……」ステバン・グリヤーエフが休暇でいた丸一ヵ月を、二人は一晚でも徒^{あだ}には過ぎなかった。その頃のワルウィラには恐いものは何もなかったし、誰にも救いを求めようとせず、神のことなど爪のあかほども念頭にはおかなかった……。

しかし、ついに休暇が終わって、ステバンを見送るときがきた。彼女はだれはばかりことなく、まるで彼の妻のように、村中の人びとの前で彼の首にすがりつき、「あなたは誰を目当てにわたしを捨てていくのよ!」と、声をはりあげて泣いたものだった。

いま見送ったばかりだというのに、もう彼女はもの思いにふけりはじめのだった。へ前線にいつちゃったん

だけで帰ってくるかしら? 赤ちゃんが生まれてくるわ。年とったお母さんは家事のうえでは手伝い役にすぎないし、その上にもし突然、薬^{くすり}の後家さん^(婚約すると二本に相手は死んだり破談になることをい)になつて泣かなきゃならんとしたらどうしよう? 帰ってきて欲しいわ! もし出来ることなら四つ這いでもいい、森や川や町を越えてあの人のいるところへ行きたい。どうしたらいいのかしら?! どうしたら?! 為す術もなく坐って、なにもかもがこのようにはやばやと終わってしまったんだと考えては、冷汗三斗の思いをしておればいいんだわ……終わってしまったんだって?! いや、そんなことは許すことできないわ! なにかをしなくちゃ!……

すべてに気がついていたグラチーハ婆さんは、のべつこう繰り返していた。

「そんなにくよくよするのはもうおよし。やせて、やたらと血を汚すだけだよ。お祈りするんじゃよ! お前は神様^{かみさま}でものを忘れとったのさ、傲^{おご}りの虫にとつつかれていたんだよ。その傲^{おご}りの虫のために、こんなひどい苦しみを我慢せにゃならんとはのう!」

ワルウィラはなにかをしなければならなかった。恐怖にさいなまされているのだ。おそらく、いや実際に母親の言うことが正しいのかも知れない。母親の言うこと以外に不安から逃^{にげ}がれるどんな手段^{だん}も思い浮かびはしない

のだから。そこで、はじめワルワラは興奮と不安のあまり言うことをきかない唇で、毎晩「神よ、助け給え！」とささやき声で祈るようになった。

祈りが通じたのか、それとも、それ自身そういうことになるはずのものであったのか、とにかく、ステパンが復員して帰ってきた。女のようなまつ毛にも、スマートな歩き方にも変りはないが、ただ蹠が直っていたのと、以前に比べると眼がずっと冷たくなっており、「伸びておくれよ、裸麦……」の歌も、そしらぬふりをして憶い出してはくれなかった。

絶えざる恐怖にびくびくして、やつれはてたワルワラは、「神様、お助け下さい！ 今ステパンの心は荒れ騒いでおります。それを静めて、あの人の愛撫をお返し下さいませ」と秘かに祈るのだった。しかし、ステパンは落着かず、焦だたしげにぶつぶつ不平ばかりこぼしていた。

「ここは退屈だ。いいか、みてみる、そのうちにかびが生えちまうからな」

しばらくすると、彼は不意に家を飛び出して町へ行き、家具工場へ就職してしまった。生活が安定し次第、ワルワラとロジカを呼び寄せると約束して。

もし、ステパンが家にしっかりと留っていたら、暮し向きがどんなに変っていたことだろう。世間なみの家庭

があつたら肩見の狭いこともない。夫であり父親であり、主人であり一家の支えである人がいれば、心配事も彼と半分ずつ分け合い、どんな不幸も大したことなくなる。力強い夫の肩と並んで暮しておれば、明日という日を前にしていったいどんな恐ろしいことがあるものか、平気で生きていけるだろうし、神様をわずらわすことなど何もありませんのだ！

だが、ステパンは出ていったままで、帰ってくるというはっきりした望みもない。家庭の問題でワルワラの唯一の支えになったのはグラチーハ婆さんだけである。ところが、このグラチーハ婆さんは自分で自分を当てにせず、神の助けを乞うばかりで、いつも「お祈りするんじゃ！ お祈りするんじゃよ！ 神様のほかに救いを求められるところなどありません。主は万能じゃでう……」と口ぐせのように繰り返すばかりである。

そこでワルワラは毎晩、ひざまずいて聖像が安置してある聖壇に頭を垂れた。

「神様お助け下さい！ 聖母さま、守りの神様、私にもお恵みを。ステパンが酒や女遊びにふけりませぬようにお守り下さい。都会の、きれいに紅や白粉をぬった女に惹かれませぬように……」

都会で、ワルワラの夫を横取りしたのがめかしこんだ女であつたか、めかしこんでない女であつたかはわか